

花に風

yukikago

昨日の夜の事だった。

夏祭りですくった金魚が五匹いて、そのうち二匹はすぐに死んでしまった。

残りの三匹はかなり長生きで、もう三年は飼っている。うち二匹は金魚のままの大きさだった。一匹が妙に巨大に成長してしまって、目も体格の分でかくてぎょろぎょろしていた。

当初からすると色素がかなり薄くなっていて、申し訳程度に背中が赤くなっている。お腹は何がつまっているのか分からないくらいにぷっくりしていた。ちょっと近づけば中の空気が抜けて、萎んでしまうんだろう、と私は薄々考えていた。

水槽はコケだらけで、もうそれが当たり前で、掃除するとか、そういう事はよく考えていなかった。

餌をあげて、金魚をしばらく眺めていると、その巨大な金魚の右目が黒く濁っている事に気づいた。もはや目というよりは墨汁で薄汚れた紙みたいであった。

そしてその目は、私が見ている前で、それが当たり前であるかの如く綺麗に破れた。水の中で水分を含んだ紙に衝撃を与えた時みたいに、金魚の動きに合わせて破れていた。

金魚は目が破れると、急に動きを止め、破れた右目を上に水中に静止する。

私は、ああ、こいつも死んだか、と思いながらそれを眺めていた。気持ち悪いとか、悲しいとか、そういう感情らしいものはない。ただ、目の前でそんな事が起こったという事を、冷静に受け止めていた。

金魚なんて、よく死ぬものだ。仕方ない。むしろここまで巨大になって、長生き出来た事が幸運だろう。

しかし、よくよく金魚の右目の中を見ると、その中にも水槽があった。

砂利があって、水草があって、そして、その中にも死んでるであろう金魚が、目立つ事を狙ってるかのように水槽の底で赤々としていた。

その風景を見せる事を目的としていたかのように、死んだと思っていた片目しかない金魚は泳ぎを再開する。

もはや幽霊のような金魚は、左目もまた濁っており、その時になって初めて、私は恐怖を感じた。

私は三匹の金魚をバケツに移し、コケを掃除し、水草を新しいものに変え、砂利もよく洗い、バケツと合わせるとちょうどよくなるくらいの水を水槽にためた。

バケツの金魚たちを水ごと放り込んでやると、金魚たちはいつも通り泳ぎ始めた。片目巨金魚は夢でも幻でもなくて、やっぱり現実としてそこにいて、泳ぎ、エサを食べ、眠り、時になくなった右目を私に見せる。

どんな恐怖も、所詮は一過性のものに過ぎない。慣れてしまえば、どんな事でもすぐにそれが当たり前のものになってしまう。片目巨金魚だって、右目がなくなった事に慣れている。私も、右目がなくなった金魚に慣れてしまった。

でも不思議な事は不思議な事として残り続けていて、片目巨金魚の右目に出来た小さな水槽と、その中に住む死んだ赤い金魚はそのままだ。水草も、砂利も、そのままだ。

巨金魚の左目は水槽の水を変えてからは、普通の、いつも通りの、ぎょろぎょろとした目をしている。酸素を入れるための機械も動かすようになったから、心なしか三匹の金魚の動きは軽快だった。

エサもちょっと値段の張る、新しいものにした。新しいエサは金魚に大変に評判で、ひらひらと尻尾を動かしながら必死に口に詰め込もうとしていた。そうやって周りを見ずに必死で食べているものだから、時々巨金魚の長めな尾が、普通の金魚に噛みつかれそうになった事が幾度かあった。その度に巨金魚は、死んだかのように動きを止める。もちろん、右目を上にして、水中に静止する。そのたびに私は巨金魚の水槽を見てしまうのだけど、やはり中の金魚は死んだままだ。しかしやっぱり、死んでいる事を強く意識させるかのように、美しい赤さを保っている。むしろ死んでいる方が美しい。動かず、騒がず、周りの力でいとも簡単に運命が決まっている様が美しい。死んでいるから、尾だけがひらひらとしていて、それが水草と同じ動きなものだから、水草の中での紅一点といった感じがする。体は一番大きめの砂利と同じくらいで、それもやっぱり、無機質な砂利の中で輝いている。やはり死んでいるからこそ美しい、と私がため息をつくたびに、巨金魚はまた死んだふりをやめて、泳ぎ、エサを食べ始める。

家に人が来る事は稀だから、巨金魚は私以外の人には知られていなかった。

私は巨金魚を人に見せるのは嫌だったし、他の人だってこんな気持ち悪い金魚を見たら大層に驚くに違いないだろう。誰かに知られたら、そのうちどんどん私の巨金魚の事が噂として広まって、わけのわからない、私の知らない人達が見物に来たり、研究機関に連れて行かれたり、もしかしたら解剖なんかして、巨金魚の事を綿密に調べ上げようとするだろう。

私の巨金魚だ。私のであって、いくら学術的に価値があろうとも、私は誰にも巨金魚を譲らないし、お金を積まれても応じる気はない。ああ、でも、金額によるかもしれない。しかし基本的にNGだ。論外だ。巨金魚は誰にも見せてはいけない。あの右目の美しさは誰にも知られてはならない。何故そう思うのかは私にも分からないのだけれど、とにかく、巨金魚は隠し通さないといけなものだと硬く信じていた。

そうなるの色々と手間をかけなくてはならないと思った。家に人が来た時のために、巨金魚を隠すための布を初めは用意した。

しかし酸素を出す機械の音で水槽がそこにあるという事がバレてしまうという事に気づいた。そうしたら好奇心の強い人に巨金魚が見つかってしまうかもしれない。

私はダミーの水槽を一式を買ってきて、そこに砂利と、水草と、適当にグッピーあたりを入れておく事にした。こうすれば、機械の音はグッピーを飼ってるから起こる事なんだと、相手の目を逸らす事が出来る。耳を欺く事が出来る。ついでにそこそこ、殺風景な部屋が和らぐような感じもする。

グッピーもやはり魚だから、定期的に死を見る事が出来た。私は、グッピーが本当に死んでいるかどうかをよく確かめた。目が水槽になったグッピーは今のところ、いない。死んだふりをする

ような賢いグッピーにもお目にかかった事はない。そして何より、その死に様は、巨金魚の右目とは比べ物にならない程平凡で、吐き気がし、面倒な存在だった。

私の家はマンションの一室で、小さいながらも土のある敷地だったので、グッピーはそこにとりあえず埋めておいた。たまに水草に絡まって面倒な死に方をしているやつなんかがあると、水草ごと埋めて、新しい水草を放り込んでおく事にしている。面倒な事をするくらいなら、お金で解決した方が楽だ。

私は毎夜会社から帰ってくると、金魚とグッピーにエサを与えた。

今までは適当に扱っていたけど、巨金魚が異変を起こしてからというもの、生活は若干、巨金魚を中心に周り始めている。水槽にコケが目立ってきたらすぐに除去し、砂利に食べ残しのエサが残って腐っていたら洗い、水草は巨金魚の好みそうなものを常に探し続けている。

ダミー側の水槽もそれなりに掃除はやるが、それは巨金魚のついでくらいのやり方だったので、本当に適当にやっていた。

今までは玄関に水槽を置いていたのだけれど、そうすると宅配便が来た時に人に巨金魚が見られてしまうので、人目につかない、でもダミー水槽からは遠くない部屋の奥に場所を移した。代わりに今はダミーの水槽を玄関から見える位置に置く事にしている。

テレビはうちにはない。でもラジオはあるので、私は家にいる時はよくラジオを聞いていた。

ニュースの時間になると、くだらない政権争いから、いつもの交通渋滞の情報、明日の天気などが流れてくる。たまにご当地的な雰囲気、ローカルな事も話す。

その時ラジオで流れているのは、街に不思議な生物が出没し始めたという話題だった。そういう奇形の動物なんてよくある話だ。工場の排水に環境ホルモンの何かが含まれていて、それを浴びたり飲んだりした生物が異変をきたす。その子が奇形になる。当たり前の、よくある話だ。私はそういう不思議な形の動物を……巨金魚以外でだが……見たことはない。そもそも人間以外の生物に最近ではほとんどお目にかかった事がない。せいぜい飼い犬か、野良猫か、コンビニの光に群がる蛾くらいなものだ。

ラジオは「二頭のトカゲ」とか「本来あるべき鱗のない魚」とか、グロテスクな生物を挙げて、人間がいかに酷い動物であるかを延々と述べていた。自分自身も人間であるくせに、汚染物質を流す工場で作られたものを食べたり使ったりして生活しているくせに、そういう現実から目を遠ざけて汚いところだけを抜き出して卑下している連中には反吐が出そうだった。あまりに気分が悪くなったので、私はラジオを切った。

そうすると家に響く音はお隣のテレビの音と、水槽の水に空気を送る機械のモーター音くらいになった。

私自身、五体満足であるし、奇形ではないし、そういうものに憧れもしないし、蔑む事も特にしない。でも、もしかすると私の体はすでに環境ホルモンだらけで、それによって子供が奇形になるのなら、それはそれで問題だと思った。しかし環境ホルモンの摂取を制御する術を、私は持っていない。1から10まで食に関わらない限り、制御は不可能だろう。が、それでも制御が完璧に出来るわけでもない。もし、そんな術を持っているのなら、さっきのラジオの話題など笑い飛ばし

ているはずであると思う。

休日はいつも家に引きこもって、大抵の場合は寝て過ごしてる。

ただ最近、巨金魚のための水草を探すために色々な場所に出かける事が多かった。水草なんてコンビニで手に入る程気楽に見つかるものじゃないから、お店を探す事そのものに苦労した。電話帳で水草を売っている場所を探して行ってみると、ペットショップに鞍替えしてて、水槽関連の商品を取り扱ってないところもあった。そもそも電話帳の情報が古くて、廃業して店舗が廃墟同然になっているところもあった。

直接電話して聞けばいいじゃないと思う人もいると思う。でも私は電話というものが苦手で、電話越しの声というものがとても聞こえづらいし、毎回聞きなおすのも手間だし、わざわざそんな気苦労をするくらいなら、直接行った方が気楽だと思っている。行って水草がないよりも、電話の方がダメージが多い。実に馬鹿な人だ。

そういう自分の性分もあって、ここ最近は何日も、家にいない事が多かった。金魚達はつきっきりでなくても勝手に遊んで、勝手にエサを水中から得れるのに、何故か私は金魚にばかり関心がいつてしまう。

そうやって色々なお店に足を運んでいる時、最寄りの川まで出た事がある。最寄りと言っても何十キロも離れたところにある川で、普段私が生活する限りでは絶対に近寄らないところだ。その川は堤防と堤防の合間の横幅だけは立派な川で、普段は生活排水だらけで黒く濁っているし、臭いもなんだか洗剤のような感じがする。実際、川の端には洗剤のような油で出来た泡が立っているところがあり、この川の大きな要素が人為的に作られているものであるというのがよく分かる。その汚い川には黒い鯉がいて、数匹が流れに逆らいながら身を寄せ合っている。ここの鯉は何故か全部が黒で、川の色と合わさっていつも見つけるのに手間がかかる。

祖父の家が前、この川の近くにあって、その頃の川はもう少し透き通っていて、黒い鯉の方がむしろ目立つくらいであった。今となっては夢幻のような話であるくらい、水は黒く濁り、川底は多分ゴミだらけで、水面は油で虹のように光っている。

こんな川でもたまに大雨が降ると氾濫しそうなくらいの水量になるらしい。大雨の日、ラジオでよくこの川の名前が上がっていたから、氾濫する川なんだというイメージがある。実際にこの近辺に住んでいるわけではないから、氾濫してる様子を、私は見たことがない。見たいとも思わない。

その日の収穫はゼロであった。水草を売っている店は見つけたのだが、前に試した事のある水草しか置いてない店ばかりであった。金魚に感情があるのかは知らないが、少なくとも、収穫がない事を巨金魚は怒るかもしれない。今日は少しエサを多めにしておこうと思う。

その汚い川の下流に専門店を見つけたのがごく最近の話である。

専門店が専門店と掲げるだけあって、今まで私が見たことも聞いたこともないような不思議な水草を扱っている。水草なんて砂利に植えつけるタイプのものばかりだと思っていたが、中には水中に漂わせるすかさずのマリモみたいなものもあり、見てて中々に面白いものだった。私はとり

あえず巨金魚に似合いそうな、やはり砂利に植えつけるタイプの水草を買った。この水草はこの専門店で飼育したものだそうで、普通に流通しているそれとは若干違うものらしい。私は巨金魚の好きそうな水草を探す事はするけれども、水草そのものには全く興味がないので、その水草の名前はよく覚えていない。

家に帰って水草を植え替えてやると、心なしか巨金魚は嬉しそうに水草の周りを泳いでいる。どうやら気に入ったようで、私は安堵と満足感を得た。遠くまで行って買って来た甲斐があるというものだ。

どうにも不安ばかりが先行して、どうすべきか、手をうちあぐねていた。

巨金魚の右目が、日に日に巨大化していき、それと比例するように巨金魚本体も大きくなっていった。もっとも、巨金魚の成長は右目よりも緩やかで、普通の金魚から片方だけ出目金という奇妙な状態になっている。

ある晩帰宅すると、普通の金魚一匹が忽然と姿を消しており大層に驚いた。水槽の全ての面から目視してみるも、普通の金魚一匹はどこにもいない。巨金魚がいくら巨体になったとしても、金魚がいくら雑食であってとしても、まさか共食いなどということはあるまい。

私は念のため巨金魚も観察した。巨金魚はいつも通り悠々と動き、もう一匹の普通の金魚の体当たりに驚き、死んだふりをする。もちろん右目を上にしている。

巨金魚の成長により初めて判明したのが、右目は透明な膜のようなもので覆われているという事だった。よく考えたら当たり前で、右目の水槽の砂利や水草が目からこぼれ落ちた事はないから、当然そこには壁があって然るべきなのだ。

私はいつも通りの巨金魚の動きに合わせて、いつも通りに右目を覗く。そこにはいつも通りの砂利と、揺らめく水草と、死んだ赤い金魚と、そして、普通サイズの金魚が悠然と泳いでいた。

右目の水槽に住人が増えた……これは由々しき自体であった。あの空間は死があるからこそ美しいのである。動物という生命のない空間に、生命であるかのように紅に輝く金魚の死体があるからこそ、あそこは生命の息吹があり、美德といえる沈黙があり、廃墟の誘惑があるのである。そこにただの、普通の生命が悠然と活動しているのは実に腹立たしい事であった。しかし、巨金魚の目玉から異物を排斥する術も、ガラスのような眼球に触れようとする度胸も、私にはない。しかしその触れる事の出来ぬところがまた美点でもある。

耐えるしかない。いずれあの命も、美しい景観となるのだろう。私はそう信じている。

私はとりあえず、残りの普通の金魚をグッピーのいる水槽に移すことにした。この金魚もまた、巨金魚の水槽に吸い込まれる可能性がある。これ以上あの美しき水槽に余計な汚物を足す事は決して許されない。

今日もまたラジオを聞いていた。

もはや奇っ怪な動物の話はコーナー化していて、目撃例と捕獲例がひっきりなしに報告されている。仕事の同僚も奇形生物を目撃した、とこの前給湯室で自慢していた。同僚の話だと、それは蛙のような、蜻蛉のような、しかしそれでいて尻尾は魚のようであったという。私はまだその

ような怪しげな、もはや都市伝説のような異型の生物に出くわした事はない。きっと巨金魚に比べれば月とスッポン、姫と獣、死と生くらいの差があるのだろう。同僚の自慢気な顔と、それに聞き入る別の同僚の顔を見ながら、私はそんな事を思っていたのだった。

私は台所に向かい、洗い物をしていた。今日もカレーだったので、油で皿が酷く汚れている。食器用洗剤をスポンジにかけ、私は皿と、やっと中身が空になったアルミ鍋を拭いた。こうやって洗い物をしているとよく指が切れるものだったが、ここ数週間は手荒れどころか素肌の乾燥すらない。いくらこすってもみずみずしさを保っていられるのではないかと誤解しかねないくらい、私の指は絶好調だった。

ただ、少し親指と人差し指の合間が痛いのが気になる。特に何かをした覚えはないが、痛くて悶絶するようなものでもない。

人間のご飯が終わったので、私は巨金魚にも食事を与える事にした。巨金魚はまたいつものように死んだふりをしている。右目を見ると、砂利があり、水草があり、そして赤い金魚がいなかった。よく確かめたが、赤い金魚はいない。いつものように右目に見惚れる事を期待してただけに、私は慌てた。巨金魚は右目を上にして全く動かない。水槽を叩いてみたが、何も反応がない。叩いた衝撃に応じて、ただ水中をゆらゆらとしているだけだ。

あの美しい右目はもうない。水槽の中の死んだ金魚もない。少し透き通った滑らかな鱗も、赤と白の絶妙な配色も、目に焼きつくような光沢も、もうない。

一緒に入り込んだ汚物も赤い金魚と一緒に消えてしまっている。巨金魚が死ぬと右目の水槽も一変してしまうものだったのだろうか。もう二度と、あの水槽は再現出来ないのだろうか。私は巨金魚が死んだ事よりも、右目の水槽がもう二度と見れない事に涙した。次の日も、その次の日も、また次の日も、更にその先も……私はほとんど眠れず、食べ物も食べる事がなく、家と会社だけをぬるぬると往復する日々を過ごした。

この世が地獄であると思ったのは、後にも先にもこの時だけであろうと思う。

地獄から抜けるにはどうすれば良いのだろうか。賽の河原に行ったのなら石を積み上げれば良いだろうが、私が最寄りの川で石を積み上げたところで巨金魚は生き返らない。もしかしたら川を探せば巨金魚のような魚がいるかもしれない、と思って休日丸一日川を眺めていた事もあるが、そのような異型は全く見つからなかった。いかにも毎日河原を散歩していそうな犬連れのおじいさんを捕まえて聞いてみたが、変人を見るかのような目をしながら知らないと言われた。

金魚のいそうなところは全て回ってみたが、やはり右目に水槽を持った金魚はいない。そんな金魚がいればまず表に出す事はないだろう。あれは見る人に独占したい魅惑をもたらすものだ。私なら絶対に表に出す事はしないし、そんな金魚の話がされたらまず知らないと答えるだろう。誰かが私の知らないところで巨金魚を見てうっとりしている事を考えるだけで腹立たしかった。それは私だけの私の悦楽であって、決して他人のものではない。巨金魚が水槽にぶつかる事を想定してわざと脇にエサを入れ、死んだふりをさせて右目を見ようとするような姑息なテクニックも多分わかっているであろう。私は顔すらも分からぬ仮想敵を殴りたい衝動に駆られた。何故私の前になくて、奴の前にあるのだろうか。憎い。実際に存在する人間かどうかも分からないが、

とにかく憎い。そんな奴がいれば殺す。そして金魚を奪い取る。巨金魚の魅力を知っている者は私一人で十分だ。それ以上いはいけない。

私は一人、石を川に投げた。怒りに任せて投げたので、そこそこ遠くまで飛んでいった。その石はそのまま川の中に入り、どぼんと音を立てて川底へ沈んでいた。何度か繰り返していると、日頃使わない筋肉を使っているせいか肩が痛みだした。肩に合わせて、違和感のあった親指と人差し指の合間も痛む。

職場の同僚が奇形の生物をついに捕まえたらしい。

それは金魚のような形の魚で、左目が墨汁の染みた紙のように濁っており、右目は水槽のように砂利と水草が入っているという。

あまりに奇っ怪すぎて、他の同僚は嘘だろうと決めつけていた。そんな生物は生物じゃない、生きてない、流石に嘘だろう、などなどの意見が同僚に寄せられたが、同僚はよほど自信があるのだろう。そのような異論に全く動じない。

私はその席で、笑顔のままで腸を煮えくりかえしていた。なんでお前が巨金魚を持っているんだ。それは私のもので、お前のものじゃない。あの水槽は私のために神がもたらした奇跡なのであって、その美しさを秘密にせず人に簡単に話してしまような俗物が持つようなものではない。

そんなに見たいなら家にこいよ、と同僚は気楽に言う。軽い男なので、それで女を家に入れる口実にしているのだろう。そのように巨金魚を出汁にする態度にも余計に鼻についた。私はトイレに行くと言ってその場を離れ、個室の鍵をかけてから思い切り壁を殴った。腹の奥底から湧き出るどす黒い何かと、手の甲に染みる痛みが共鳴している。感情に任せて壁を殴っても、余計に憎さが積もるだけである。しかしだからと言って振り上げた拳を下ろす先がないのも癪で、私は何度か壁を殴った。あまりに強く殴ったせいで腕全体が痛む。

少し落ち着いたので外に出て、元の席に戻る。同僚達が驚いた顔をしていたので何かと思って聞くと、唇から血が出ていると言われた。どうやら頭に血が上りすぎて、唇を噛み切ってしまったようだ。大丈夫、ちょっと切っただけだよ、と同僚に笑って答えておいた。

軽い男は実に扱いやすいもので、私はいとも簡単にその金魚を見る約束を取り付ける事が出来た。

その日に備えて、私は色々なものを準備した。まず普段しない髪型とサングラスをし、さらにマスクをつけ、顔が分からないよう十分注意を払った。服装も普段とは違う派手めな服を着た。普段の私を知っている人なら、多分、同一人物だと見分けがつかないだろう。

私はその格好で、遠くの街まで行った。巨金魚のための水草を探し回っていた範囲など生ぬるいくらいの遠いところまで行った。駅前の電話ボックスにおいてある電話帳から包丁が売っていきそうな店を探して、そのページを破ってポケットに詰め込んだ。

本屋で近辺の地図を買い、先ほど破ったページを元に包丁を探した。とりあえず長めで、切れ味が良さそうで、一度使えればそれで十分そうなものを探した。数件の店舗を回ったところ、イメージ通りの包丁が見つかったため、それを買って家に帰った。

私は買った包丁の包を開ける。それは刀を包丁に似せたような細くて長めのもので、力のない私でも振り回すのが容易なくらい軽いものだった。さらにこの包丁には鞘のような木製のケースもついていて、持ち運ぶのにも苦労しない。これは良い包丁を買った、と思った。

その日は清々しい程の晴れで、空は雲ひとつなかった。

私はその軽い同僚のアパートにお邪魔した。格好や化粧も派手めにして、普段とは違うようにしてきたものだから、同僚は大層に驚いたようだった。そして開いた胸元をチラチラと見ては情けない表情をしている。

そこにかけてよ、と言われ、私は同僚のベッドに腰掛けた。同僚の部屋は何故か玄関の次にリビングがあり、次の部屋にキッチンがあるらしかった。

同僚はお茶の準備をしているのだろう、隣のキッチンの部屋にいる。私はリビングを見渡したが、水槽らしきものは影も形もない。やはり彼は女っつらしなのであろう。

親指と人差し指の合間が痛む。私は持ってきた刀のような包丁を手にした。あれば巨金魚は貰うし、なくても嘘をついた代償は重い。巨金魚の美しさを騙るのは罪だ、死罪だ、地獄に落ちるべきだ。

キッチンとリビングの間の扉が開く。

私は包丁を両手で握り、そして、突然首筋から血を吹き出した同僚を見てしまった。

私は返り血を浴びる。

どたり、と、まるで物であるかのように、同僚は倒れた。カップが割れる音もなく、お盆が地面を叩く音もない。ただ、どたり、と。倒れる音しかしなかった。

私が握ったと思っていた包丁は、すでに同僚の首に刺さっている。自分の腕を見ると、親指と人差し指の合間から腕が生えており、それが同僚に復讐をしたらしかった。

私は叫んだ。声の限り叫んだ。

人間を刺すとはこういう事だったのか。血を浴びるような事だったのか。

もっと簡単なものだと思っていた。もっと美しいものだと思っていた。己に、こんな湯気だつようなものがかかるとは知らなかった。何故誰も教えてくれなかったのか。教えてくれていれば、もっと、上手に出来たはずだろうに。

それにこの奇妙な腕だ。

私の意思とは無関係に、腕はぐにゃぐにゃと、機械のように関節を動かしている。どう見ても人間の関節ではない。どう見ても指が三つほどしかない。明らかな異形の腕であった。

そしてその腕は、くるりと手のひらをこちらに見せた。その手のひらには人間の左目と、巨金魚のものと同じ右目があった。水槽に、砂利と、水草と、そして、死んだ赤い金魚がいる。

あった！ 私の右目が！

私の右目は私の手の内だったのか。なんでそんな事に気づかなかったのか。もっと早くに気づいていれば、地獄の日々を過ごしたり、同僚を殺す必要もなかったというのに！

腕はまたくるりとまわり、同僚の首に手を伸ばす。そして包丁を抜き取り、そのままの勢いで私の首元を狙った。

○

その日、千葉県某アパートで殺人事件が発生。殺害されたのはアパートの住人A氏で、刃物と思われるもので首筋を刺され出血多量により死亡と断定。

また、事件現場には、人間のものと思われる片腕が発見されており、警察では犯人逮捕と片腕の調査が行われる予定である。

なお、この片腕は人間の大きさをしたカエルの足のような緑色の腕であった事、手のひらに目らしきものがあつた事、片目がなくなっている事など、不可解極まりない事が多い事は、一般には伏せられている。